産経新聞
平成31年(2019)日刊27403号
4|23[火]
産業経済新聞(サンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN
発行所 ©産業経済新聞東京本社2019
〒100-8077東京都千代田区大手町1-7-2
東京(03)3231-7111(大代表)

歴史の交差点

武蔵野大特任教授 山内昌之

将軍のプレゼント

プレゼントの授受はもらう者も受け取る者も心がはずむハレの〝儀式〟である。モノがあふれかえる現在では、絶対に誰もが最高と思うプレゼントを決めるのはむずかしい。しかし、江戸時代の武家社会では刀剣こそ最高の贈答品であった。それは昨今の刀剣ブームで女性にも人気のある芸術美もさることながら、独特な輝きと精巧な研ぎで磨きのかかった刀剣を武家の魂の象徴と見なしたからだろう。

少し前に出された歴史学者、深井雅海氏の『刀剣と格付け』は、亀甲貞宗や包丁正宗はじめ国宝の刀剣や、道誉一文字などの御物を美しい写真で紹介すると同時に、刀剣が武家社会で果たした儀礼的な役割を多色刷りの図を交えて説明している。

ことに徳川家と大名家との刀剣贈答は、初代家康から11代家斉までの間に1841件も行われた。そのうち家督相続の御礼が408件、致仕(隠居)御礼が137件にも上った。将軍も大名の参勤交代における国許への暇乞い、褒美、大名邸への御成りの際の下賜品に刀剣を惜しまずに使ったものだ。もちろん刀剣・刀工にもランキングがあり、最上級の刀工は粟田口国吉、同吉光、越中義弘、相州正宗の4人だけだったようだ。

将軍の下賜品といえば刀だけでなく、金銀も含まれる。しかし、下賜品の中でも刀は断然トップに置かれた。江戸城中でどの部屋が使われるか、着座の際の将軍と大名との距離はどのくらいか、誰が下賜品や献上品の進達をするのか。このあたりの流れるような儀式の進行は、江戸城儀礼の華といってもよい。

深井氏によれば、尾張徳川家8代目の義淳(のち宗勝)の家督相続御礼は、将軍の生活空間「奥」に一番近い「表」の儀礼空間、黒書院で行われた。

黒書院は、大広間や白書院よりもやや小ぶりだったが、それでも上段(18畳)・下段(18畳)・囲炉裏の間(15畳)・西湖の間(15畳)からなり、周囲を入側(縁頬)で囲まれていた。入側は約190畳相当の広さで畳を敷いてあった。

さて、献上の刀は下段上から4畳目、銀は5畳目に置かれた。しかし、老中たちでさえ下段には入れず、入側の左上から1畳目、(献上品を)披露する役目を担った月番老中は中央寄り2畳目に坐したにすぎない。

義淳の場合も下段6畳目、つまり、刀よりも下座から、縮緬と同じ並びで上段の将軍に拝謁したのだ。御三家筆頭(尾張徳川家)の義淳でさえ下段最末座であり、刀よりも後方に控えるあたりにも、刀が一段と格の高い献上品であることが分かる。

刀剣をはじめ、膨大な献上品や下賜品はどこに保管されたのだろうか。それは納戸方と腰物方と呼ばれる、「表」の広い東側空間である。黒書院のほぼ2倍の空間が贈答品の管理と保管に割り当てられ、刀だけのために腰物方が設けられたのだから、いかに刀が幕府儀礼の中心を占めていたかを理解できるというものだ。

贈答文化の観点から令和の新時代を迎えるのも興味深いのではないか。

(やまうち まさゆき)